につたわっている理由はどこにあるのかということが，本書によってあきらかにされたと思う．が，これは，著者がもっている全体を見とおす視野と細部を見おとさない注意力，それと彼の大胆で細心な手腕によってのみなされうることである．また本書から読者は多くのことを学ぶのであるが，そのなかでもっとも肝要なことといえば，本書の標題がしめすように，伝統の継承のなかにおいてホメロスの創造性を見いだそうとした著者の態度そのものであろう．そしてこれを実現した著者の手法は，「西洋古典学」における「文学研究」のあり方をわれわれにしめしているといえる．

松本仁助

松本仁助『ギリシア叙事詩の誕生』，233＋xiページ，　世界思想社　1989年12月．

古今東西の傑出した作家にはたいてい謎が多いが，ホメロスはその謎が最も多い詩人の一人であろう．第一，『イリアス』『オデュッセイア』の両叙事詩はホメロスの作といわれているが，それ自体不確定的な要素を多くはらんでいる．また両詩篇の成立はほぼ紀元前８世紀後半と推定されてはいるものの，なぜそのような歴史上の「暗黒時代」にかくも巨大な叙事詩が作られたのか，さらにはどんな方法で創作され伝承されたのか，まるでストーンヘンジを眼の前にして問いかける謎のようだ．しかしストーンヘンジのような太古の遺跡とホメロスの記念碑的作品との決定的な違いは，後者がことばの産物だということである．ことばは，語りつぐ人がいなければすぐに消滅するが，受け継がれる力を内蔵していれば，一定の用途のために作られた石の物体とは異なり，ほとんど無制限の使用に耐える．じじつ，ホメロスはみずから創ったそのことばの記念碑で，古代ギリシア人の言語文化を比類なく豊かにし，しかもその後のヨーロッパの言語芸術にもはかり知れない影響を与えた．要するに，ホメロスはおそらく紀元前８世紀末ごろに死んだのに，そ

の作品がこれほど長く生命を保ってきたとすれば，それはさまざまなホメロスの謎の中でも最大の謎ではないか．

松本仁助氏の『ギリシア叙事詩の誕生』は，こうしたホメロスの詩に関する歴史的な謎と文学的な謎の両面に対して，より深く考える糸口を与えてくれる．本書は一般向きに書かれているが，取り上げられた問題点はすべてホメロス学の核心にふれるものばかりであり，けっして基礎的知識を紹介するためだけの入門書ではない．

さて本書は，全体が6つの章と付論とからなる．第Ⅰ章「ヨーロッパ最古の文学作品をめぐって」では，まず古代から近代までのホメロス研究にふれながら，「叙事詩の環」といわれる叙事詩群と『イリアス』『オデュッセイア』が切り離されて，この両詩だけがホメロスの作とみなされるにいたった経過を説明している．近代ではさらに，ヴォルフの『ホメロス序説』以後，両叙事詩は複数の詩人の手になるという分析論と，両詩が一人の作者による（または両詩がそれぞれ異なる一人の作者による）とする統一論の2つの見方に分かれ，近年は第3の立場として口誦詩論が登場した．著者は，口誦詩論の立場にたち，ホメロスの詩を「統一論的」に考えるという方針を示す．そもそも『イリアス』と『オデュッセイア』がホメロスの作品かどうかは，何を「ホメロス的」と見るかにかかっている．ここから，文字使用の有無，作品の構成，詩全体の意図といった諸問題がでてくるが，こうした問題は，文学としてのホメロスの謎である．著者の議論は，「ホメロスとは何か」というこの文学上の謎から始まっている．

著者は次の第Ⅱ，第Ⅲ章では，われわれの眼をこの文学上の謎から歴史上の謎へと向けさせる．第Ⅱ章「トロイア戦争は史実か」は，ホメロスの詩の舞台となったトロイア戦争が史実かどうかを論じ，第Ⅲ章「トロイア戦争の人々」では，作品に登場するトロイア戦争の人々，すなわちトロイア軍とギリシア軍は歴史上どんな種族であったのかが追究される．

古代ギリシア人は，トゥキュディデスのようにトロイア戦争は実際の出来事だと信じていた．近代では，1870 年からのシュリーマンの遺跡発掘以来，ブレーゲンを代表とする歴史的事実説とカーペンターらが主張する架空説に分かれているが，著者は 1964 年の JHS 誌における「トロイア戦争」論争

を紹介しながら論点を整理している．それによると，純粋な口誦詩であるホメロスの詩は史実をある程度正確に伝承しうる可能性があり，また実際の発掘調査の結果，トロイアの遺跡の第７層前期（Troja VIIa）の破壊が歴史上のトロイア戦争に対応しうると考えることができる．そこで著者は，Troja VIIa がギリシア軍によって破壊されたとするならば，その原因は何だったのか，つまり Troja VIIa の崩壊とギリシア人の遠征とを結びつける必然性を問いなおす必要があると述べ，ミュケナイ時代末期のギリシア社会の中にその理由を探る．

線文字Ｂ文書を手掛りとして明らかになった当時のミュケナイ社会は，王（ワナックス）を頂点とする官僚機構であり，それは中央におけるワナックス── ラウァゲタス── ヘクエタスと，地方におけるコレテル── プロコレテル── テレスタスに代表される．このうち地方官職は，主にバシレウス（バシレウオンテス）という有力階層によって占められた．一方，耕作者や職人などの自由人と奴隷が存在し，生産その他の仕事に従事していたが，線文字Ｂ文書による数量的統計では，奴隷の生産だけでは王宮の生活は維持されえず，大量の不足分は地方からの徴収と貢献でまかなわれていた．この経済的圧迫をさらに増大させたのが，王宮の奢侈品の購入である．しかし奢侈品への欲求は支配層に限らず，被支配層のバシレウオンテスや民衆も共有していたから，この強い欲求をみたすために，ギリシア人は支配者も被支配者も一団となって外国への略奪戦争におもむいた．その際，ギリシア諸王国は，外国の諸勢力と対抗するためにもっとも有力なミュケナイを中心に連合体を結成して略奪を続けたと推測される．

さて，トロイアの富がギリシアの眼に入ったのはこの時であった．トロイアは当時，第６層の都市が地震で倒壊し，第７層前期の王城が建っていたが，ギリシアの連合軍はこの Troja VIIa が弱体であるとみて遠征を企てた．これが，のちに叙事詩の主題となったトロイア戦争である．この戦争が１０年もかかったのは，トゥキュディデスが指摘したようにギリシア軍の財力不足のためであり，この点でも，伝承は記録文書が示すミュケナイ時代末期の経済的疲弊と一致している．

それでは，この戦争の当事者たち，すなわち「トロイア人」と「ギリシア

人」とは具体的にはどんな人々だったのか．叙事詩などでは，トロイア人もギリシア人も同じことばを話すのを前提としている．しかし実際には，そんなことがはたして可能だったのか．まず考古学上の資料では，前 3000 年紀前半にエーゲ海域に侵入した印欧語族は，黒海西方の穴式墳墓を特徴とするクルガン文化Ⅲ期の種族で，これがトロイア第１層の都市を破壊した．次のクルガンⅣの種族は，Troja Ⅱと初期ヘラディック時代（EH）Ⅱ期のギリシア諸都市を破壊した．一方前 2100 年ごろのレルナの遺跡には，このクルガンⅣ の種族が居住した跡があり，その地の古いダナオス神話や印欧語 *danu- 「水」との関連などから，この種族はギリシア名で「ダナオイ」と呼ばれていたことがわかる．このダナオイは，ギリシアで EH Ⅲ の文化を創ったが，それと同種の文化と発展過程が EH Ⅲの 時期に対応する Troja Ⅲ，Ⅳ，Ⅴにも認められ，さらにのちの Troja ⅥとⅦa もそれと継続して発展している．したがって，トロイア戦争を戦ったトロイア人は，クルガン文化を継承したギリシア名ダナオイという印欧語族だったと考えられる．

他方ギリシアでは，前 1900 年ごろに北部の種族がダナオイの諸都市を破壊し，ミニュアス土器やメガロン建築をもつ独創的な中期ヘラディック時代（MH）の文化を創始した．その後の後期ヘラディック時代（LH），つまりミュケナイ時代のギリシア人はこの北部種族の子孫である．彼らは，ミノア文化を受容し，それを「ミュケナイ化」して独自の文化を築いたが，末期には経済的に行き詰り，トロイア遠征を企てた．言語学的にも，MH と LH の種族は，ダナオイすなわち前ギリシア人を駆逐したギリシア北部の原ギリシア人から分かれた種族であり，彼らは共通の言語的背景をもっていた．それゆえミュケナイ時代にトロイアを攻撃した種族，つまりアカイア方言のギリシア語を話す種族アカイオイが，同じ印欧語族でも別系統の言語を使うトロイア人（ダナオイ）とは自由に話すことは難しかったはずである．

さて，以上のような歴史的背景の中にホメロスの叙事詩を置いてみると，作品の歴史的な謎の多くの部分は解けていくように思われる．実際にミュケナイ時代のギリシア人は，富を獲得するためにトロイアを攻撃した．その戦争で彼らは，財政難のため苦戦を強いられたが，結局１０年位かかってこれを滅ぼした．しかしそのギリシア人はそのため一層弱体化し，その後前1100

年ごろには北方にいた西ギリシア方言を話す種族の侵入を受け，ミュケナイ世界は崩壊した．だがミュケナイ文化は，そこで根絶されたわけではなかった．ミュケナイの子孫たちはギリシア各地に分散移住し，彼らによって祖先の偉大な文化は継承され，発展した．とくにイオニア地方では，祖先の栄光を伝えるトロイア戦争の伝承は，恵まれた環境の中で培養され，形式を整えられた．ミュケナイ文化崩壊後約４世紀間のいわゆる「暗黒時代」は，この新たな創造の時期を指す．そして前８世紀ごろのホメロスの大詩篇の出現は，じつはこの創造的な時代の終局的産物だったのである．

ところで，ギリシアの暗黒時代のそもそもの由来は，そのころの情報が伝わっていないこと，すなわち文字がないことであった．線文字Ｂの使用は王宮文化の破壊とともに途絶え，新たな文字アルファベットがギリシア世界に普及するのは前８世紀ごろからである．この無文字時代に，トロイア戦争の伝承はどのようにして受け継がれ，ホメロスの偉大な創造にいたったのか．著者は第Ⅳ章「トロイア戦争の伝承と口誦詩としての『イリアス』，『オデュッセイア』」でこの問題を取り上げ，これまでの歴史的な謎解きから，われわれの視線を再び文学上の謎へとふり向ける．

この問題に関して著者は，第Ⅰ章で予告したように口誦詩論の見方をとる．考古学的には，前８世紀ごろのギリシアでは一応文字使用の形跡は確認されており，そのことがホメロスは詩作に際し文字を用いたとする見方を可能にしている．しかし著者は，作品の文体その他の根拠にもとづいて，ホメロスの叙事詩は記憶による創作であり，詩作に文字は不用だったとの見解を示す．

その根拠の一つは，後世のプラトンなどが書きとどめた叙事詩の語り手ラプソドスの描写であり，それは朗読ではなく口演（暗誦）を表わしている．次に，『オデュッセイア』に登場する吟誦詩人デモドコスとペミオスは，「アオイドス」といわれ，叙事詩を竪琴に合せて「歌って」いる．第三に，『イリアス』『オデュッセイア』の文体は，パリとロードが明らかにしたように口承の伝統から生まれた多くの定型句を保存しており，この定型句の技法はさらに，ダクテュロス六脚律という厳しい叙事詩の詩格に助けられて，記憶による創作と文字を用いない口演を容易にした．もっともユーゴスラヴィアの叙事詩の例が示すように，記憶にもとづく創作であるかぎり，同じ作

品でも毎回の口演の内容は異なったはずである．しかし天才詩人ホメロスの出現以降は，その権威がもたらした影響でアオイドスの比較的自由な創作はなくなり，ラプソドスによる固定したテクストの正確な伝承の段階に入った．そしてこの段階では，すでに文字使用もさかんになっていたから，例えば書くことに堪能なラプソドスなどが，ホメロスのテクストを文字で固定したと考えられる．

口誦詩論によって，口誦詩の技法と展開は証明された．しかし口誦詩論の限界は，ホメロス（またはある作者）がなぜあれほど複雑な長編を，何のために作ったのかという疑問に答えられないことにある（しばしばこのレベルで文字使用の可能性が論じられる． Cf. 拙論「ホメロスの詩と文字使用」，『国立民族学博物館研究報告』第 9 巻第 3 号，1984年，pp.609-630 および 同「詩と文字使用 ── ホメロスをめぐって ── 」，『京都産業大学国際言語科学研究所所報』第 7 巻第 2 号，1986年，pp.90-115）． おそらくこの疑問は， 主題や構成を深く検討し， 作品の意図を明らかにすることによってのみ解明することができるのであろう．本書の第Ⅴ章「『イリアス』と『オデュッセイア』の創作意図」は，この文学上の謎の中心に迫る試みである．

『イリアス』の冒頭からわかるように，この詩で作者が聴衆に訴えようとすることは，まずアキレウスという英雄の怒りである．そしてその怒りは，愛する女性を奪われた怒りであり，アキレウスが彼女を奪ったアガメムノンに無分別を思い知らせることが，この物語の前半部の筋書をなしている．後半は，アキレウスが戦線復帰を拒絶したため，最愛の友人を失い，彼を殺したヘクトルに復讐するまでの経緯を語っている．著者はまず，アキレウスの怒りの性質に着目する．そもそもアガメムノンがギリシア人を率いてトロイア戦争を起したのは，トロイア人パリスがメネラオスから妻ヘレナを奪ったことに復讐し，彼女を夫のもとに返すことであった．アキレウスは，このアガメムノンの戦争目的に共鳴して参戦したが，もともと彼にとっては，ヘレナという特定の女性の奪還が問題なのではなく，むしろ一般の正常な夫婦関係の回復こそが重要であった．ところがアガメムノンは，アキレウスから妻に相当する女性を取り上げ，正常な夫婦関係をみずから破壊することによっ

て，トロイア戦争の目的とアキレウスの参戦理由を公然とふみにじった．アキレウスの怒りは，このようなアガメムノンの戦争の普遍的意義を否定した行為に向けられているのであり，その怒りの結果，彼が親友パトロクロスを失い，さらには自己の死を招くという事態は，生命を賭けて夫婦愛の理想を守ろうとしたアキレウスの悲劇的運命を表わしていると考えられる．

一方『オデュッセイア』では，オデュッセウスが多くの障害をのりこえて帰国し，妻と再会するという話が語られる．物語のクライマックスは，主人公が館を占拠した求婚者たちをすべて殺す場面であるが，しかし著者は，そこで求婚者たちはなぜ全員殺害されねばならないのかと問う．求婚者たちの法的な罪は，ペネロペイアの実家に求婚を申し出て，本人とその息子の意向をたしかめるという正式の手続をふんでいないことである．しかしそれにもまして，ペネロペイアがオデュッセウスの生死をまだ確認しておらず，夫の帰国を内心期待しているのに，彼女を無理やり再婚させようとする行為は，もっと深い罪である．この求婚者たちの罪は，ゼウスが第１巻で示したように，アガメムノンの留守中にクリュタイムネストラと密通したアイギストスの罪と同じであり，いずれも正常な夫婦関係を破壊するものとして懲罰の宣告を受けている．それゆえ『オデュッセイア』の作者は，主人公とその妻の夫婦愛の強さを語るとともに，それをこわすことはきわめて大きな悪であるとの考えを聴衆に訴えようとしたと考えられる．

このように見てくると，『イリアス』も『オデュッセイア』も夫婦という人間関係を重視しており，いずれの作者も人間社会において夫婦愛を中心とするよく似た思想をもっていたことがわかる．構成に関しても，両詩は１０年間の出来事を５０日以内の事件に集約して語るという共通性を示している．しかし，『オデュッセイア』には正義を厳しく司る神々が登場するのに対し，『イリアス』では神々は必ずしも正義を体現していない．このことから，『イリアス』がホメロスの作とするならば，『オデュッセイア』はホメロスの作ではなく，例えば彼の弟子の地位にあった人の作品であろうと推定される．

両詩篇の統一性と原作者に関する以上の議論は明快であり，大変興味深い．おそらく夫婦関係を中心に置くという思想は，ミュケナイ文書から想像され

るような厳格な縦の社会的身分制度と物質経済中心の社会的価値観とはかなり異なった新しい考え方であるように思われる．ここに，「暗黒時代」の人人の新しい社会観や人生観の反映を読みとることができよう．またこの思想は，近代的な考え方にも通じるものであり，ホメロスがその後ヨーロッパ人に広く読まれたという最大の謎を解く鍵になるかもしれない．しかし評者はここで少し疑問に思うのだが，はたして『イリアス』では，『オデュッセイア』ほど正常な夫婦関係は重視されているのだろうか．たしかにトロイア戦争の大目的は，ヘレナを正式の夫メネラオスに返すことである．だが『イリアス』の第１巻で総大将アガメムノンは，自分は正妻クリュタイムネストラよりもクリュセイスの方を愛しているのだと言い（Il.1.113-114），アキレウスからブリセイスを奪う以前から，正常な夫婦関係を軽んじるような発言をしている．また第１巻の口論において，アガメムノンもアキレウスもともに，女性は彼らにとって自己の功績に対する「褒賞」(geras) だと何度も繰り返し述べている（Il.1.133, 135, 138, 161, 185, 356. cf. 276, 507). つまり，女性はまず第一に名誉のあかし・誉れのしるしとしての意味をもっている．そのために，クリュセイスとブリセイスを奪われたアガメムノンとアキレウスは激怒したのではないだろうか．とりわけ短命のアキレウスにとって，名誉の獲得とその回復は重大である．彼にとっては，女性そのものよりは，むしろ名誉こそが，身近に迫る「死を超越する崇高な目的」であった．だからこそ，第９巻でアガメムノンが莫大な財宝を提供するとともに，ブリセイスを以前のままの状態で返そうといって正常な夫婦関係の回復を申し出たとき，アキレウスは再びアガメムノンの尊大な態度に反発し，彼の誠意をうたがってきっぱりと拒否したのであろう．この第９巻のスピーチでもアキレウスは，ブリセイスについて再び「名誉のしるし」(geras) ということばで言及している（Il.9.344, 367). 彼はまた，たとえ彼女は返されても「侮辱」(lobe: Il.9.387) の償いがなされないのなら， 女性の返還は全く価値がなく，自分は故郷に帰ってふさわしい正妻をめとった方がましだと述べている（Il. 9.398-399). しかし故郷で妻とともに幸せに暮すことは，「予言」が示すようにアキレウスにとって，生きるかわりに不滅の誉れをあきらめることを意味する（Il.9.410-416). 同じく第９巻のポイニクスとアイアスの

話に対するアキレウスの態度の微妙な変化，および第１８巻でパトロクロスの死の知らせを受けたときの彼の早急な判断と決意は，この生と死の二者択一が，アガメムノンとの口論以来つねにアキレウスの念頭にあったことを示している．さらにその後の第１９巻では，アガメムノンが直接アキレウスに対して「名誉のしるし」(geras: Il.19.89) を奪った行為を謝罪したとき，アキレウスは返されたブリセイスに一言のことばもかけておらず，ただひたすらヘクトルに復讐して 「高貴な誉れ」(kleos esthlon: Il.18.121) を得て死ぬことのみを考えている（そのうえ，この巻のブリセイスがパトロクロスの遺体に向かっていうことばでは，アキレウス自身が以前彼女の夫や家族を殺害して正常な夫婦関係と幸せな家庭生活を破壊したという事実が示されている： Il.19.291-296）．したがってアキレウスが終始求め続けたものは，やはり英雄としての誉れ，あるいは英雄としての「真の」誉れであって，物語に示された彼の悲劇的な運命は，そのような誉れの獲得が結局は夫婦愛や幸福な家庭生活とは相容れないものだという考え方を表わしているように思われる．こうした『イリアス』の英雄観は，夫婦愛を重んじる『オデュッセイア』の思想とも対立・矛盾し，両詩に対する統一的解釈を妨げるかもしれない．それでも，評者には，『イリアス』が訴える人間観や道徳は，『オデュッセイア』のそれよりもはるかに人生の幸福に対して悲観的で，また内面的に厳しいもののように思われてならないのである．

さて，第Ｖ章の終わりで著者は，ホメロスの定型句による文体や語形にはミュケナイ時代にさかのぼる古い表現が残っているように，両詩の物語展開自体の中にも，夫婦愛を貫徹するために物質的な償いを否定するという大筋と平行して，物質的なものを重視する古い時代の慣習や思想がうかがえると指摘する．そして最後の第Ⅵ章で，そのような「古い層」についての事例の検討に入る（第Ⅵ章「『イリアス』，『オデュッセイア』における古い層の例」）．

まず『イリアス』に関して取り上げられるのは，パリスの人間像である．パリスは『イリアス』では無力な臆病者として描かれている．これはとくに，第３巻のメネラオスとの決闘の場面が与える印象である．しかし第６巻では，このようなパリスを戦場に連れもどすために，ヘクトルが危殆にひんした戦

線を離れてわざわざトロイアの城にもどる．ホメロスはさまざまな工夫をこらしてこの矛盾をつくろっているが，しかし根本的な事実は変えることができなかった．それはつまり，パリスが古い伝承ではトロイア軍の中心的人物で，ギリシア軍のアキレウスに相当する重要な地位を占めていたということである．ここから著者は，従来は勇者として活躍していたパリスを，ホメロスが夫婦愛を重んじる立場から人妻を奪った背徳者パリスに作り変えたと結論づけている．これは興味深い推論である．とくにアキレウスは一般にヘクトルと比較されるのがつねであるが，ここではアキレウスをまずパリスと対比する根拠が示されており，アキレウスの英雄像を別の角度からとらえなおす手掛りともなろう．例えば評者は，アキレウスの生死の選択のモチーフは，じつは「パリスの審判」を下敷にして，そのアンチテーゼをなすべくホメロスが考えついたのではないかとひそかに推測している（この推測も，結論的には著者の夫婦愛に関する見解とは全くくいちがうが，これについてはあらためて議論の機会をもちたいと思う）．

次に，『オデュッセイア』の古い層の例として，女神カリュプソの実像について検討されるが，これもじつに興味をそそる問題である．この詩において，カリュプソは思いやりのある優しい女性として描かれながら，第７巻では「恐ろしい女神」だと述べられる．著者によると，その理由はまず，カリュプソの名がじつは能動相動詞 kalypto「隠す」に由来し，「覆い隠す」女神を意味することである．そしてこの場合，「覆い隠す」とは死者を埋葬することにほかならず，それゆえカリュプソは元来死の女神であった．さらに詩におけるカリュプソの島オギュギアの描写も，死と関連するものにみちており，それゆえ，オデュッセウスは，カリュプソに引き留められながら，じつは死の誘惑を受けていたのである．だが人間にとって死とは，限りある生をあきらめて，不老不死の神になることである．自分を神にしようとして誘惑するカリュプソに対して，オデュッセウスは確固としてうつせみの妻を選び，人間としての生を選択する．著者は，ここにも，生をたくましく肯定する叙事詩人の新しい人間観を指摘している（この第Ⅵ章のフィナーレは，著者の多年にわたる『オデュッセイア』研究の中からにじみでた味わいのある美しい文章である）．

以上で本論の内容を要約整理しつつ，いささかの感想をつけ加えてみた．この書評では紙幅の関係で省略するが，最後の約７０ページにわたる付論「『オデュッセイア』の解釈（第１巻ー第４巻）」は，本論の内容を補強しており，緻密な統一論的解釈の一端が示されている．本書は全体として，ホメロスの叙事詩に対するバランスのとれたアプローチの方法を示してくれる．とくに歴史・考古学上の最新の問題と文学解釈上の重要な課題とを結びつけ，平明な文章で複雑な叙事詩成立の条件と実態を誰にでもわかりやすく解明した手腕には敬意を表したい．「あとがき」で著者自身書いているように，本書の意図は困難な課題に対する議論のきっかけを作ることであった．読者がホメロスの謎に自分でも取り組んでみようという気になる点では，本書の意図は達成されていると思う．

小川正広